

時をかける恋

坂下信二は測定結果に満足していた。

「これでタイムマシンの可能性がみえきたぞ」

助手の吉田雅人もうれしそうだ。観測によると、ある粒子が光速を超えたのだ。

「先生が、光速よりも速い粒子があれば、時間の壁を乗り越えることが可能だと言われたときは、荒唐無稽と思っていましたが、それが現実のものとなったのですね」

坂下は東都大学の理学部物理学科の教授である。理論物理学を専攻している。坂下の表向きの研究テーマは、時間がなぜ一方向にしか流れないかという問題である。生まれた赤ん坊は歳をとるだけで、若返ることはない。森羅万象すべて時間は過去から未来にしか流れない。これを「時間の矢」と呼んでいる。

時間の矢は、熱力学におけるエントロピー増大則との関連が昔から指摘されてきた。しかし、坂下の最近の研究で、時間にも可逆性があるかもしれないというヒントがえられていた。

「しかし、実際にタイムマシンをつくるとして、超光速に耐える材料があるかという点が問題だな」

「その通りですね」

「もう少し研究が進んだら、材料の専門家に相談する必要があるかもしれない」

「でも、先生、そんなことを話したら笑われるだけかもしれませんよ」

「そうだな」

実は、坂下がタイムマシンの研究をしているということは、学会ではいっさい報告していない。もし、そんな話をしたら、笑いものになるだけだろう。いや、あいつは気がふれたとして学会から追放されるかもしれない。

いま現在、坂下がタイムマシンの研究を進めていることを知っているのは、助手の吉田だけである。その吉田も、最初に坂下が話を打ち明けたときは、冗談とばかり思っていたようだ。

アインシュタインの相対性理論によれば、高速を超える粒子は存在しない。タイムマシンは、それに反するからだ。

「先生、ところで明日から恒例のスキー合宿ですね。準備はよろしいのですか」

坂下研究室では、夏のテニス合宿と、冬のスキー合宿に学生を連れていくのが年中行事となっている。

「そうだな。そろそろ帰るか」

吉田は独身だが、坂下には妻がいる。

なぜか妻の里奈は、最近神経質になっていた。今度のスキー合宿のことも心配しているようだ。実は、坂下は、大学時代にスキーで国体に出たほどの腕前である。

「心配することはないよ」

と言っても、里奈にはなにか気になることがあるようだ。時々、心ここにあらずといったように、なにかを考えていることがある。

坂下は、計算結果をまとめたペーパーをかばんに入れると、研究室をあとにした。

「吉田君はまだ帰らないのかい」

「ええ、もう少し計算結果を整理したいので」

「明日の朝ははやいから適当なところで切り上げたほうがいいぞ」

坂下は、そういい残して研究室を後にした。

スキー合宿

スキー場には貸切りバスで向かった。研究室は総勢で 15 人になるので、その方が楽なのだ。バスの中は、大騒ぎだった。10 月から研究室に配属になった四年生がギターを伴奏に歌をうたっている。坂下は、半分うとうとしながら、若い連中の歌をきいていた。

スキー場の宿泊はバンガロー形式になっていた。何人かのグループで一軒のバンガローをシェアしている。坂下は教授の役得で、ひとつのバンガローを一人で使うことになった。

ただし、学生の本音は先生とは一緒に泊まりたくないということかもしれない。助手の吉田は、博士課程の大学院生三人と同じバンガローに泊まっている。

研究室の女子学生は 3 人だが、専用バンガローを楽しんでいるようだ。温泉までついていると喜んでいる。

坂下は、スキー合宿には仕事を持ち込まないことに決めていた。研究のことはいっさい忘れて、スキーに没頭する。そのほうが、後から、いいアイデアが浮かぶこともある。

久しぶりのスキーは楽しかった。坂下は上級者コースをひとりで楽しんだ。こぶ斜面を自在にすべりおりる。頬にあたる風がこちよい。何人かの学生が坂下と一緒に挑戦しようとしてきたが、斜面をみたときに怖気づいたようだ。

温泉のひとり風呂につかりながら、坂下は疲労が足から遠のいていくのを感じていた。ただし、今回のスキー合宿には気になることがあった。妻の里奈だ。

坂下が家を出る時

「あなたは本当にでかけるのね」

と確認した。その表情がさびしそうだったのだ。

「あれはいったいなんだったのだろう」

坂下に思い当たることはまったくなかった。

風呂上りに冷蔵庫のビールを開けてのんだ。冬にビール。昔では考えられない贅沢だ。バンガローの中は、暖房がよく効いて風呂上りはTシャツでも暑い。

坂下は、妻の里奈の様子がふと気になった。電話してみよう。そう思ったとき、ドアの呼び鈴が鳴った。

「いったいこんな時間に誰だろう」

学生が遊びに来たのかもしれない。そう思い、坂下はドアを開けた。すると、そこには、はでなスキーウェアを着た少女が立っていた。

「こんばんわ」

そう言って、少女は坂下に、にこっと笑いかけた。

坂下は

「あなたはどなたですか？」

と聞いた。

すると少女は、それにこたえず

「今夜の宿がないのです。ここに泊めていただけますか？」

と言う。

「宿がない！」

「ええ、未来から来たので泊るところがないのです」

どうやら、少女は酔っ払っているようだ。誰かが、悪ふざけして酒を飲ましたのにちがいない。みると、まだ高校生にしかみえない。

坂下はだまって少女を追い返そうとしたが、少女は、いかにも寒いというようにぶるっと震えた。みると、スキーウェアといっても、かなりの薄着だ。

「そこでは寒いだろう。とにかく中に入りなさい」

坂下は、少女をバンガローの中に招じ入れた。

自宅の電話を聞き出して親にむかえにきてもらおう。きっと、スキーで迷子になったにちがいない。

坂下は、少女に厚手のカーディガンを着せて、椅子に座らせた。

「さて、それでは、どこで迷子になったか聞かせてもらおうか」

少女はきょとんとした顔をして坂下をみた。

「スキー場には家族と一緒に来たの？それとも友達と一緒にかい？」

「スキー場？」

「ああ、ここはスキー場だよ」

「スキーってなんですか？」

坂下はいらいらしてきた。スキーウェアを着ているくせに、何を言っているんだ。

そして、ふと気づいた。確かに、彼女のスキーウェアは変だ。とても薄い。まるで肌着のようだ。

「冗談はもうよそう。君の家に電話をかける。電話番号を教えてくれないか。きっと、ご両親も心配していると思うよ」

ところが、少女は坂下の質問には答えず

「いまは西暦何年ですか？」

と聞いてきた。

「何を言っている。2007年だよ」

すると少女は驚いたような顔をした。

「やだ、やはり間違ってしまったのね」

坂下は馬鹿馬鹿しくなった。この少女は何を言っているのか。

「何を間違えたんだ！訪ねるバンガローか？」

「ちがうの。わたしが行きたかったのは1987年なのよ」

どうやら、この子は、本当に頭がおかしいようだ。

それからのふたりの会話はまったくかみ合わなかった。少女は、自分は未来から来たと言い張った。ばかばかしいにも程がある。

そして、どんなにしつこく聞いても少女は、自宅の電話番号を坂下に教えなかった。

きっと家出をしたのだろう。家族とけんかでもしたにちがいない。警察に電話をしてひきとってもらおうと思ったが、ふと気づくと外は大吹雪だ。夜も遅い。今日は、このままバンガローに泊めて、また、明日でも家族に連絡しよう。坂下はそう思った。

みると、少女はいつのまにかソファで寝てしまっていた。まだ子供なのだ。寝顔をみると、本当に可愛い。未来から来たなどと荒唐無稽なことを真顔で話しているが、明日になれば素直になって自宅に帰るだろう。坂下は少女に毛布をかけてあげた。

少女の髪の毛はブルーネットだ。最近、髪を染める若者が多い。この子もそうなのだろう。

この時、坂下はあれっと思った。少女の顔はどことなく妻の里奈に似ている。

「そうだ里奈に電話してみよう」

そう思ったとき、床に財布らしきものが落ちているのに気づいた。どうやら少女のもののようだ。

そのままにしようと思ったが、少女がいくら持っているか少し気になった。

もし小銭しか持っていなかったら、いくらか現金を渡す必要があるかもしれない。

失礼とは思ったが、中身をのぞいてみた。中には、コインとお札が入っている。これだけ入っていれば大丈夫だろうと思ったが、なにか違和感がある。そして気づいた。

「これは本物の金ではない」

そして財布の中身をあけてみた。

「なんだ？このコインは」

そのコインは銀色に輝いている。どうやら、海外のコインのようだ。この子は外人なのだろうか。坂下は、コインを手にとった。

「アメリカのコインとも違うな」

ところが、そこには千円と書いてある。

「冗談だろう」

いたずらにしては、このコインは精巧にできている。そして気づいた。コインには 3007 年と書いてある。

「30007 年！」

いまから 100 年後ではないか。この少女は、さっき未来からやって来たと冗談を言っていたが、ここまで凝った嘘をついたのだろうか。

坂下は、紙幣も取り出した。これは万札のようだ。そして、紙幣に描かれている顔をみて驚いた。小泉純一郎ではないか。紙幣のほうの発行年は少し古くて 3003 年となっている。

しかし、坂下はすぐに悟った。たぶん未来ごっこが高校生のあいだではやっているにちがいない。なぜなら 100 年後にはペーパーの通貨は完全に姿を消し、すべて電子マネーになっているだろうからである。こんなことは誰でも予想がつく。

「やはり子供のやることは、どこか抜けているな」

少女の寝顔をみて、坂下は思わず笑ってしまった。

「そうだ里奈に電話しよう。この少女のことも報告しておいたほうがよいかもしれない」

しかし、里奈は電話にでなかった。

なぜか、里奈は携帯電話を嫌っていた。そして、情緒不安定な様子の里奈に、気晴らしに旅行でもでかけたらどうかと勧めたことを思い出した。こんな時、里奈に実家があればいいのであるが、里奈は天涯孤独である。

「旅行にでもでかけたのであろうか」

翌朝

昨夜から降り続いた雪は、まだ降っていた。視界が悪い。助手の吉田から電話があつて

「今日の午前中は自由行動でよろしいですか？」

と聞いてきた。

きっと学生たちは徹夜で騒いでいたのだろう。午前いっぱい寝ていたいということなのだろう。坂下は承諾した。この雪では、スキーをするのも大変だ。

受話器をおくと、後ろに少女がたっていた。目が覚めたようだ。

「それが電話ですか？」

「ああそうだよ」

「感激です。教科書に30年前までは使われていたとありました」

少女は、坂下の携帯電話を珍しいものでも見るように手に取った。その時、受信音になった。

すると、やけどでもしたように少女は電話を投げ捨てた。

「おい何をするんだ」

坂下は突然のことに驚いた。

電話は吉田からだった。朝食の準備を心配してきたのだ。食材はたっぷりある。心配ないつつたえた。吉田は、こまかいところまでよく気がまわる。

少女は手をおさえながら

「ごめんなさい。でも、こんなに強い電磁波を使っているとは思わなかったの
で、驚いてしまったのです」

どうやら、うそつきではあるが、科学的知識は少しあるようだ。携帯電話の電磁波で程度で、手がしびれるわけがない。

「そういえば、昔のひとたちって電磁波に対する抵抗力がものすごく強かったらしいですね。電磁シールドが当たり前の世界にいるわたしには考えられないことです」

と真顔でこたえた。

坂下は説教をしようと思ったが、思いなおすことにした。もしかしたら少女は誇大妄想狂かもしれない。

「ここは、だまってつきあってあげるか」

それから、坂下は未来の話少女から聞きだした。最初は、こんなでたらめを、よく言えるなと思っていたが、次第に、少女の話にひかれていった。

坂下が、特に驚いたくんだり、少女が

「アインシュタインの相対性理論のほころびを見出した日本の研究者がタイムマシンを発明した」

という話であった。

「それは、超光速を利用するという意味かい？」

「ええ、確かにそうでした」

この話は誰にもしたことがない。坂下の秘密である。それを、どうして、この少女は知っているのだろうか。

「発明者の名前は覚えているかい？」

「ええ、確か吉田さんでした」

「吉田！」

坂下は驚いた。もしかしたら、自分の名前が出るかもしれないと期待していたからだ。

「ところで、君は、そのタイムマシンに乗ってきたというわけか」

「そうです」

坂下は、もう一度少女のかっこうを見た。最初はスキーウェアと思っていたが、どうやら素材は違うらしい。いままで見たこともない生地できている。本当に未来から来たのだろうか。

そんな荒唐無稽な話を信じろというほうが無理である。しかし、少女の話には、いまのところ矛盾はない。

「ところで、未来の世界でも紙のお金を使っているんだね。とっくに電子化されていると思ったんだがな」

皮肉を込めて、坂下は聞いた。

「もちろん、一度、完全に電子化されたことはあります。ところが事件が起こったのです」

「事件？」

「ええ、データセンターで誤作動が起きて、すべての財産を失ったひとがたくさん出るという事件が起こったのです」

坂下はおやと思った。少女がすぐに降参すると思っていたからだ。

「実は、テロリストによるサイバー攻撃だったのですが、そのおかげで社会に大混乱がおきました。それ以降、紙幣やコインが見直され、再発行されるようになったのです」

なるほど、一応、理屈は通っている。どうやら、少女の頭は変だが、論理性には長けているらしい。

ひと通り坂下の質問が終わると、少女は坂下から、現代、つまり 2007 年の話を聞きたがった。ばかばかしいとは思ったが、少女の質問に対して、ていねいに答えていった。

少女は坂下の話に興味津々である。

「ところで、君の行きたい時代は 1987 年と言っていたけど、その時代になにが

あるんだ」

すると、少女は急に無口になった。言っているのかどうか迷っているようだ。そして、ようやく口を開いた。

「タイムマシンの本当の発明者は他にいるという噂があるのです」

「本当の発明者！」

「ええ、そのひとに私はあることを伝えるために未来から来たのです」

坂下はいったいなんだろうと思った。その時、吉田からの電話が入った。少女はびくっとしたように体をそむけた。本当に電磁波に弱いのだろうか。

吉田は、雪が止んだので、スキーに出かけるという連絡をしてきた。しかし、坂下は少女ともう少し話していたかった。

「1987年に行くといっても、その格好じゃどうしようもないな。それに、お金だってもっていないだろう？」

「それでも行かなければならないのです」

少女は真剣である。

「ところで、君のタイムマシンはどこにあるの？」

坂下は、ばからしいと思ったが、一応聞いてみた。

タイムマシン

少女に坂下のアノラックを着せて、一緒にバンガローの外に出た。その銀色の機体は、松林の中にあった。大きさは、軽乗用車程度である。

「これがタイムマシンなのかい？」

少女はこくりとうなずいた。

まさかとは思ったが、それらしきものは本当にある。

坂下は機体に触れた。なんらかの金属でできているようだ。銀色に光っている。材料の専門家でないので素材は良く分からない。ふと足元をみると、金属の破片が落ちている。坂下をそれを拾った。

機体の中をのぞくと、それはコックピットのようなものである。いろいろな計器が並んでいる中心に椅子がある。そこが操縦席のようだ。

「しかし、どうして年代を間違えたのだい」

「ええ、どうやら電磁波干渉を起こしたようなのです」

「電磁波干渉？」

「タイムマシンは、光速よりわずかに速い速度で移動します。電磁波は光の速度で伝播するので、それが強いと乱れが生じるのです」

坂下は驚いた。この子は、自分の理論の概要を知っているとしか思えない。

「でも、君が行きたいのは1987年だと言ったね？」

「そうです」

「これから、どうやって行くのかね」

「まだ、燃料は十分です。ただ、年代の再設定のやり方が分からないのです」

「それでは、どうしようもないな」

坂下はつきあっていられないというように、突き放すような言い方をした。

「そろそろ、このお芝居ともお別れしよう」

すると、少女は射るような目で、坂下をみた。

「あなたなら分かるはずです」

坂下は驚いた。

「この子は何を言いだすんだ」

「だまされたと思って、コックピットに入ってください」

少女の目は真剣そのものだ。

坂下は仕方なく、コックピットに収まった。機器の指示は、すべて英語で書かれている。その中で、present time と書かれている計器の表示がずれていることに気づいた。もし、自分の理論が正しいとすれば、いまタイムマシンがいる年代をゼロとしてリセットし、その年代から目標の年代までの差をインプットすればいいはずだ。

坂下は、少女にタイムマシンに乗る時に、どのように時間をセッティングしたかを聞いた。すると、予想通りのこたえが返ってきた。とすれば、この時点でリセットし、time destination を－20 years とすればよい。それを少女に告げた。

少女は安心したように坂下を見た。

「しかし、保証はできないよ」

坂下は笑った。

少女は、すぐにも目的の時代に向かいたいと言ったが、坂下は少し時間をくれるように言った。このままの格好で、1987年に戻ったのでは、怪しまれるだけだ。

いっしょにバンガローに戻ると、研究室の女子学生に連絡した。

「迷子になった少女がいるので、手助けしてほしい」

坂下は、少女と同じ背格好の生徒にお願いして、着替えを準備することにした。そして、自分の財布の中にある有り金をすべて少女に渡した。自分はクレジットカードで決済ができる。

女子学生に着替えの手伝いをさせ、未来服は紙袋に入れた。着替えが終わって、現れた少女をみて坂下はあっけにとられた。

どうやらブルーネットの髪と思っていた頭は、帽子だったようだ。いまは見事な黒髪をしている。そして、化粧もきれいに落としていた。そこにいるのは、

20 年前に坂下が出会った理奈だった。

坂下はすべてを悟った。タイムマシンは本当だったのだ。

「わたし行かなくちゃ」

そうすると理奈はバンガローを後にした。坂下を残して。

出会い

坂下はすべてを思い出した。20 年前、不安そうに自分の前に現れた少女のことを。

少女は記憶喪失だといった。当時、坂下は四畳半のアパートに住んでいた。警察に連絡しようとしたが、少女はそれだけはしないでと懇願した。うさんくさいとは思ったが、坂下は大家に頼んで、少女をあいている部屋に置いてもらうことにした。大家には、田舎から出てきた妹と偽った。

大家は、夫をなくした未亡人で、ひとのよい彼女は、坂下の言葉を信じた。

少女は、一万円札を 5 枚坂下に差し出した。結局、それらは使えなかった。すぐににせ札と分かったからだ。さらに妙なことに、少女は 2005 年発行のコインを持っていた。これも精巧にできているが、偽ものなのは明らかだ。

だが、いまなら説明できる。自分が渡した金だったのだ。2004 年に新札に変わったことを忘れていた。福沢諭吉だから、同じものと思い込んでいたのだ。

その頃、坂下は自分の研究に悩んでいた。時間を超える可能性。そんなことが可能なのだろうか。その片鱗は捕まえていた。しかし、自信はなかった。だから、研究を断念することさえ考えていたのだ。

しかし、少女は坂下をはげました。

「あなたは間違っていない。自分を信じてがんばって」と。

坂下は少女の言葉を見殺した。どうせ家出娘が、自分の居場所を欲しいがために嘘をついているのだろうと。ところが、里奈は坂下の冷たい態度にもめげることなく、励まし続けた。

すぐに、いなくなるだろうと思っていた少女は、一ヶ月たっても帰ろうとしなかった。貧乏の坂下では、もう部屋代は払えない。

大家はすっかり少女のことを気に入ったようだ。少女は里奈と名乗った。大家は、自分と一緒に暮らしてもいいと言い出した。さすがに兄妹とはいえ、四畳半の部屋ではきついと思ったのだろう。

坂下も、しだいに少女の言葉に耳を傾けるようになった。少女の言うことももっともと感じるようになったからだ。不思議なことに少女は、物理の最先端の話を知っていた。

少女と出会ってから、坂下の運気は上昇に転じた。自分の研究に希望を持つようになって、予想以上の成果が得られるようになったのだ。もちろん、タイムマシンなどという荒唐無稽なことは口に出すことはない。しかし、坂下の理論は多くの研究者から高く評価されるようになった。

少女があらわれて一年ほど経ったころ、坂下はついに大家に本当のことを話した。そして、里奈を親の元に返すべきだと提案した。驚いたことに、大家は、とくに、そのことを知っていた。里奈に打ち明けられたのだという。

ところが、いくらたずねても里奈は、自分の出身地を打ち明けない。坂下は困った。しかし一方で、里奈を放したくないという思いも強くなっていた。

里奈は自分は天蓋孤独だといった。戸籍もないという。どういう魔法を使ったのかは知らないが、大家は、里奈を自分の養子にした。

そのとき、大家は笑いながら
「里奈は、未来からきた少女なのよ」
と言った。

坂下は、大家もついにぼけたかと思った。坂下が心配したのは里奈の教育だった。まだ18歳なのに高校に通っていない。入試を受けなければ大学での教育もかなわない。坂下は、家庭教師を買って出た。

坂下が驚いたのは、里奈の知能の高さであった。大学レベルの基礎科目は教えるまでもなく、すべてマスターしていた。それから奇妙な同居生活が始まった。そして、里奈は、大家の仕事を手伝うようになった。

坂下は30歳で東都大学の助教授となった。異例の抜擢である。そして里奈にプロポーズした。実は、もっとはやく結婚したかったのであるが、里奈が自分の家族のことをいっさい話さなかったから、どうしようもなかった。

坂下邸

坂下は、自宅に急いでいた。いま、すべてが明らかとなった。里奈は本当に未来から来たのだ。自分はそれを信じてやれなかった。でも、いま分かったのだ。

実は、坂下は里奈を愛してはいたが、彼女の言っていることを完全に信じられなかった。天蓋孤独の身と言っていた。結婚式のときも、招待客から不思議がられた。新郎側の来賓は多かったが、里奈は里親の大家ひとりだった。

しかし、里奈が未来から来たということを認めれば、すべての説明がつく。大家さんは信じてあげたのに。

家の明かりはついていなかった。ドアの鍵をあけて中に入った。すべての部屋を探したが里奈の姿はどこにもなかった。

最後に食堂に入って、坂下は気づいた。ダイニングテーブルの上に手紙が置いてある。

手紙

坂下は手紙を手にとった。その手紙は「坂下先生へ」で始まっていた。なぜ信二様ではないのだろうか。

「坂下先生

この二十年間、里奈はとても楽しかったです。もうすべてを理解されましたよね。わたしは本当に、未来から来たのです。

なぜわたしなのか。そう思っているのでしょうか。実は、わたしにもよく分からないのです。このタイムトラベルには、多くのものが応募しました。なぜなら、この旅で、最大のなぞが解明できるかもしれないからです。

未来の世界でもタイムトラベルは、それほど自由ではないのです。こんなに科学が進んだ世界なのに不思議なことです。

わたしたちの世界では、タイムマシンの発明者は吉田雅人博士とされていました。残念ながら博士の発明したタイムマシンの理論は不完全でした。博士の発明では、時空間を自由に行き来できないのです。

ある時、科学者が古い文献を見つけました。それによると、タイムマシンの本当の発明者は別にいるというのです。そして、クローズアップされたのが、坂下信二という人物です。

未来の世界では、17歳はすでに大学院生です。わたしは、タイムマシンを完全化するプロジェクトに参加しました。その過程で、わたしは、このタイムマシンの本当の発明者にぜひ会いたいと思うようになったのです。

政府は、タイムマシン完全化計画には、坂下本人との面会が必須と考えました。そして決定したのです。旧型のタイムマシンを、利用しようと。なぜなら、普及型の吉田式タイムマシンでは数年の移動がせいぜいだったからです。

政府に保管されていたマシンでは、時間移動できる回数は2回までですが、移動時間の長さは自由だったのです。それなら、過去に行って、もう一度戻ってくるのが可能です。

ところが、想定外のことが起きました。2007年に異常な電磁波発生があったのです。いま思うと、原因は携帯電話の普及だったのかもしれませんが。そして私のタイムマシンは不時着しました。その時のショックはいかほどであったか、あなたは想像できるでしょうか。

わたしの使命は、1987年にあなたと出会い、そして、あなたの研究を称え、それを継続させたあと、成果を未来に持ち帰ることでした。

あなたは、この時代、自分の人生に大きな悩みを抱えていました。研究にも自信をなくしていたようです。優秀な研究者は大学からは排除される。そんな時代だったのではないのでしょうか。でも、それでは、未来はないのです。

驚いたことに、わたしは目的の時代にたどり着けませんでした。そして、別の時代に不時着したことでわたしは厳しい選択にせまられました。タイムマシンは2回しか作動しないのです。

当然の選択は、もとの時代に戻ることであったでしょう。しかし、運命なのかもしれません。わたしは、1987年に会うべきだったあなたに、20年後に会ってしまったのです。そして坂下信二という人間に興味を持ったのです。あなたは、わたしの話を荒唐無稽といいました。でも、あなたは、誠実でやさしかったのです。たとえ、妻がいたとしても。

愚かな選択とあなたは笑うかもしれません。わたしは、もとの世界に戻らず、20年前のあなたに会うことを選択したのです。たとえ、永遠にもとの時代には戻れなくともいいと思いました。

正直にいいます。わたしの選択は間違っていなかったと。最初はとても心細くて大変だったけど、あなたと過ごした20年間はとても楽しかったのです。

ところが、時間には厳しい掟があります。同時性の否定です。同じ時間にまったく同じ人間が存在してはいけないのです。いえ、この言い方は正確ではありません。その時代に暮らす他人が、同一人物が同じ時代にいると認識した時に、矛盾が生じるのです。

あなたは、エントロピーの可逆性にはじめて気づいたひとです。だから、わたしの言うことが分かるでしょう。タイムマシンは、この可逆性を利用して、時間を遡ります。しかし、そこに、さざなみが生じたら、可逆性は破れてしまいます。

つまり、あなたが、わたしのもうひとりの存在を知ったとき、いまの私は消える運命にあるのです。

これを悟った時、わたしは愕然としました。あなたは、スキー合宿でわたしに出会うのです。なにが起きるかは明らかです。そのとき、17歳の里奈は現実となり、37歳のわたしは消えるのです。

それに気がついたとき、本当にどうしようか悩みました。でも、それが運命なのかもしれません。

あなたがスキー合宿に出かけると聞いたとき、取り乱した私を許してください。でも、本当のことを言っても、あなたは、ただただ戸惑うだけだったでしょう。

そして、私という存在が消える前に手紙を書くことにしました。これが、坂下信二というひとと過ごした里奈という自分の存在を残す唯一のチャンスなの

だと思ったからです。

それから、もしわたしがこの世から消えたとしても悲しまないでください。
あなたは、そのおかげで、若い里奈に出会えるのです。

最後に、坂下先生、いや信二さん、本当にありがとうございました。

里奈

坂下は、じっと手紙を見つめ続けた。そして、手紙を強く握ると、部屋にこもった。2日ほど徹夜で机に向かった。

始動

学校に出てきた坂下を見て吉田は驚いた。あれだけおしゃれだった坂下が無精ひげだらけだ。坂下は吉田にある金属片を渡した。

「材料の先生にお願いして、この金属の成分を調べて欲しい。そして、それが入手可能かも」

それから、坂下は工作をはじめた。なにやら回路も自分で拵えている。吉田は手伝いを申し出たが、坂下は

「これは自分の仕事だ、いや自分がやらなければならない」
と言った。

金属は、アルミニウムとマグネシウムの合金であることが分かった。できるだけ機体を軽くしたいためだろうということである。業者に依頼すれば手に入るという。坂下は安心した。

吉田は驚いた。それから半年ほどして装置が組みあがった。それは、一見、大きな炊飯ジャーのようなかたちをしていた。中に人間がひとり入れるほどの大きさである。

「いよいよ完成だ」

坂下はこういうと、コックピットに入った。

「先生、まさか」

吉田はあっけにとられている。坂下がやろうとしていることが分からないからだ。

「俺はいかなければならない」

すると、坂下は time destination を -0.6year にした。

「すぐに戻ってくる」

スキー場

スキー場には、まだ雪は積もっていなかった。坂下は、里奈のタイムマシン

が不時着した林に向かった。そして、その近辺にアルミニウムの線を大きくぐるりと巻きつけた。電磁シールドをするためだ。里奈は電磁波干渉でタイムマシンの動作が狂ったといていた。それならば、それを防いでやればいいのだ。そうすれば、自分は理奈にあうことはない。

坂下は、作業を急いで終わると、もとの時間に戻った。

吉田は、坂下が現れたのを見て驚いたようだ。

「ただいま」

「先生、本当に過去に行ってきたのですか？」

「ああ」

そして、坂下は自宅に急いだ。

坂下邸

坂下は、我が家に明かりがついているのを見てほっとした。

それでも、自分の作戦がうまくいったかどうかは分からない。そして、ドアを開けた。

「あなたお帰りなさい」

坂下はほっとした。そこには妻の理奈がいた。17歳ではなく37歳の理奈である。

「今日は早かったのね。まだ、夕ご飯はできていないわよ」

そういう理奈を坂下は抱きしめた。

坂下の作戦はみごとに成功したのだ。理奈がのったタイムマシンは2007年に不時着することなく、1987年に向かったのだ。

そう思ったとたん、記憶がぐらついた。頭の中で過去がめまぐるしく襲ってくる。

「あなた、どうしたの？」

理奈が心配そうに坂下の体を支えた。

気がつくと、応接間のソファのうえに横になっていた。そばで理奈が心配そうに覗き込んでいる。

目を覚ますと、坂下は理奈に言った。

「ごめんよ。君の事を信じてあげられなくて」

里奈はだまって首をふった。

坂下は、昔を思い出していた。理奈がはじめて坂下アパートを訪れたときのことを、里奈はスキー服のような奇妙な服を着ていた。そして自分は未来からきたと言った。坂下は、家出少女のたわごとと思った。しかし、少女は無一文だった。お金らしきものを持ってはいたが、明らかなにせ札であった。

坂下は、すぐに警察に連絡しようとしたが、少女はそれだけはよして欲しいと懇願した。

その頃、坂下は自分の研究に悩んでいた。時間を超える可能性。そんなことが可能なのだろうか。その片鱗は捕まえていた。しかし、自信はなかった。だから、研究を断念することさえ考えていたのだ。

しかし、少女は坂下をはげました。

「あなたは間違っていない。自分を信じてがんばって」と。

坂下は少女の言葉を無視した。どうせ家出娘が、自分の居場所を欲しいがために嘘をついているのだろうと。ところが、里奈は坂下の冷たい態度にもめげることなく、励まし続けた。

すぐに、いなくなるだろうと思っていた少女は、一ヶ月たっても帰ろうとしなかった。貧乏の坂下では、もう部屋代は払えない。

大家はすっかり少女のことを気に入ったようだ。少女は里奈と名乗った。大家は、自分と一緒に暮らしてもいいと言い出した。さすがに兄妹とはいえ、四畳半の部屋ではきついと思ったのだろう。

坂下も、しだいに少女の言葉に耳を傾けるようになった。少女の言うことももっともと感じるようになったからだ。不思議なことに少女は、物理の最先端の話を知っていた。

少女と出会ってから、坂下の運気は上昇に転じた。自分の研究に希望を持つようになって、予想以上の成果が得られるようになったのだ。もちろん、タイムマシンなどという荒唐無稽なことは口に出すことはない。しかし、坂下の理論は多くの研究者から高く評価されるようになった。

少女があらわれて一年ほど経ったころ、坂下はついに大家に本当のことを話した。そして、里奈を親の元に返すべきだと提案した。驚いたことに、大家は、とくに、そのことを知っていた。里奈に打ち明けられたのだという。

ところが、いくらたずねても里奈は、自分の出身地を打ち明けない。坂下は困った。しかし一方で、里奈を放したくないという思いも強くなっていた。

里奈は自分は天蓋孤独だといった。戸籍もないという。どういう魔法を使ったのかは知らないが、大家は、里奈を自分の養子にした。

そのとき、大家は笑いながら

「里奈は、未来からきた少女なのよ」と言った。

坂下は、大家もついにぼけたかと思った。坂下が心配したのは里奈の教育だった。まだ18歳なのに高校に通っていない。入試を受けなければ大学での教育もかなわない。坂下は、家庭教師を買って出た。

坂下が驚いたのは、里奈の知能の高さであった。大学レベルの基礎科目は教えるまでもなく、すべてマスターしていた。それから奇妙な同居生活が始まった。そして、里奈は、大家の仕事を手伝うようになった。

坂下は30歳で東都大学の助教授となった。異例の抜擢である。そして里奈にプロポーズした。実は、もっとはやく結婚したかったのであるが、里奈が自分の家族のことをいっさい話さなかったから、どうしようもなかった。

しかし、理奈が未来から来たという話は、ついに信じられなかった。でも、いまようやく分かった。理奈は本当に未来から来たのだ。

ふと気づくと、テーブルの上にそのまま置いていた里奈の手紙が消えていた。坂下は立ち上がると理奈を抱きしめた。

「僕らはこれからも、ずっと一緒だ」

里奈はこくりとうなずいた。